

# 科学・芸術・社会の相互作用 2018-2023年度の報告

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 京都市立芸術大学美術学部 公開日: 2024-06-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 磯部, 洋明 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15014/0002000143">https://doi.org/10.15014/0002000143</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License.



# 科学・芸術・社会の相互作用 2018-2023年度の報告

Interaction of Science, Art, and Society 2018-2023

Hiroaki Isobe 磯部洋明

---

## 1. はじめに

本稿は京都市立芸術大学（京芸）美術学部のテーマ演習「科学・芸術・社会の相互作用」について報告するものである。テーマ演習は美術学部の3, 4回生および大学院生に対して開講されている授業で、一定のテーマに沿って、学生と教員が専攻を越えて、実践的な研究活動を行うことで、芸術に関わる幅広い視野と探究心、そしてコミュニケーション能力等を養うことを目的としている。テーマや授業形態の自由度が高く、複数の教員に関わる領域横断的な研究とリンクしたテーマや学生が提案したテーマで開講することができるのも特徴で、美術学部の初年次教育である総合基礎実技と並ぶ京芸独自の授業である<sup>1</sup>。

「科学・芸術・社会の相互作用」は2018年度に学生提案のテーマ演習として開講され、翌年からは教員（筆者）提案のテーマ演習として毎年開講されている。主な目的は科学を学んでいる他大学の学生と交流し、互いに学び合い、そして芸術や科学と社会との関係について考えることである。このため本テーマ演習には、京都大学を中心とした他大学の学生も参加している<sup>2</sup>。以下ではまず開講の経緯と意図、そして2018年度から2023年度までの活動の概略を説明する。次に芸術

分野の学生と他分野の学生の交流のエピソードをいくつか紹介し、その教育的意義について若干の考察を述べる。なお、私の専門が物理学・宇宙物理学であることから、授業の立案においては自然科学を念頭におきつつ芸術と対比させる形で「科学」という言葉を使っているが、実際には人文社会科学を含む様々な分野の学生が他大学から参加している。本稿では特に断らない限り「科学」という言葉を「狭義の芸術以外の様々な学問分野」くらいの意味で使用する。

## 2. 活動の概要

### 2.1 開講の経緯と意図

「科学・芸術・社会の相互作用」は筆者である私が美術学部共通教育に自然科学担当の専任教員として着任した2018年度から開講している。直接のきっかけは、同年の前期に大学院向けに開講している授業「自然科学探求特講」の履修生から、後期も大学院生が取れる授業か何かをやって欲しいと相談を受けたことで、結局その授業を受講していた学生たちが提案するテーマ演習としてその年の後期から開講することになった。翌年度からは教員提案のテーマ演習として引き続き開講しており、2019年度までは後期に、2020年度からは前期に開講している。

最初の学生提案にあたっては、私の専門が自然科学（宇宙物理学）であることから自然科学に関係したテーマで何かやるということはなかば前提であったが、具体的にやりたいことが決まっていたわけではない。提案者となった学生たちの希望も、何か特定のテーマに取り組みたいというよりは、大学・大学院を通してほとんど美術（芸術）の人に囲まれてその世界の中で過ごしてきたので、何か「新しい風が欲しい」（提案者の一人の言葉）ということだった。そのこともあり、何か特定の課題やプロジェクトを決めてそれに取り組むよりも、他大学で芸術以外のことを学ぶ学生と交流しながら一緒に何をやるかを考えてゆくということになった。私は前年度まで同じ京都市内にある京都大学（京大）の学際系の部局に在籍しており様々な分野の学生ともつながりがあったので、初年度は京大の知り合い学生に声をかけて参加してもらった。それ以降、他大学の参加者は知り合いづてで紹介されたり、活動の様子をSNSで見て興味を持った学生がコンタクトしてきたりといったルートで参加しており、割合としては京大の学生が多いがそれ以外の大学からの参加者も徐々に増えている。京芸側の学生は基本的に美術学部の学部3年生以上および修士課程の大学院生が対象で、履修者数は特に制限していないが平均すると10数人程度である。音楽学部の学生が聴講で参加することもある。

授業名に科学と芸術に加えて「社会」を入れたのは私の提案である。科学と芸術の「融合」的なことを謳ったプロジェクトは数多く、もちろんその中には興味深いものがたくさんあるのだが<sup>3</sup>、私が個人的に関心をもっているのはどちらかといえばコミュニティとしての科学と芸術が社会との関わりにおいて抱える諸問題であったためである。具体的には、分野外の人とのコミュニケーション上の困難、高い専門性や特殊なセンスが求められるというイメージ、政治権力や市場経済との距離感、コミュニティ内部のジェンダー不平等やハラスメントなどの問題、他者を調査や表現の対象にすることに伴う倫理的問題などである。科学と芸術がコミュニティとしてそれぞれ抱える課題を共有し、互いの経験から学び合うことこそが、今やるべき科学と芸術の協働であり、それにテーマ演習という場を活用して学生と一緒に取り組むことには意味があるのではと考えた。

## 2.2 2018-2019年度

開講初年次と2年目にあたる2018年度と2019年度は、参加した学生同士がそれぞれの研究や制作活動について互いに紹介しあうことが活動の中心になった。それに先立ち、美術の学生には科学分野のアウトリーチ・科学コミュニケーションにおける課題についてレクチャーを行っている<sup>4</sup>。主なポイントを挙げると、まず背景として科学コミュニケーションの歴史が専門家から一般公衆への知識伝達を重視した科学教育・アウトリーチの時代から、専門家と非専門家の双方向コミュニケーション重視にシフトしてきたこと、その背景に科学に関係しているが科学だけで答えることのできない、いわゆるトランス・サイエンス問題<sup>5</sup>が増大してきたことを解説した。また、専門用語を多用しないこと、科学的文脈や社会的要請などの研究の背景を丁寧に説明すること、やったことをそのまま話すだけでなく、相手の関心とコミュニケーションの目的や文脈に応じて伝える内容を調整することなど、科学者が非専門家とコミュニケーションする際の注意点も解説した。これらは美術の学生が芸術について話す際に役立つ部分もあるだろうし、そのまま適用するのが難しい部分もあるだろう。その意味での科学と芸術の共通点と違いを意識しながら互いの研究発表/制作紹介をしてゆこうということになった。

2018年度に、初回の活動は、京都大学総合博物館を訪問して京芸生と京大生と一緒に展示を見て回ったあと、会議室に集まってその日の振り返りを行い、お互いの視点の違いを探るということを行った。その次の回では京芸沓掛キャンパスを訪問して、工芸科の学生が施設を案内しながら自分の専攻について説明した。それ以降は、京都大学桂キャンパスのラボ見学なども挟みながら、芸術側と科学側が交互に自分の研究や制作についてのプレゼンを行うことを何度か繰り返した。美術の学生には、言葉だけで伝えきれないことがあるのは前提としつつも、自分の制作についてできるだけ言語化して話してみることを課した。その結果、何人かの学生が作品の背景を語る過程で、幼少期からの自分の生い立ちやなぜ芸術大学への進学をしたのかという個人的な生活史を語り始めたのは興味深いことであった<sup>6</sup>。

また、美術の学生による発表の中でデッサンやスケッチに関する質問が科学側の学生から出た際に、美術の

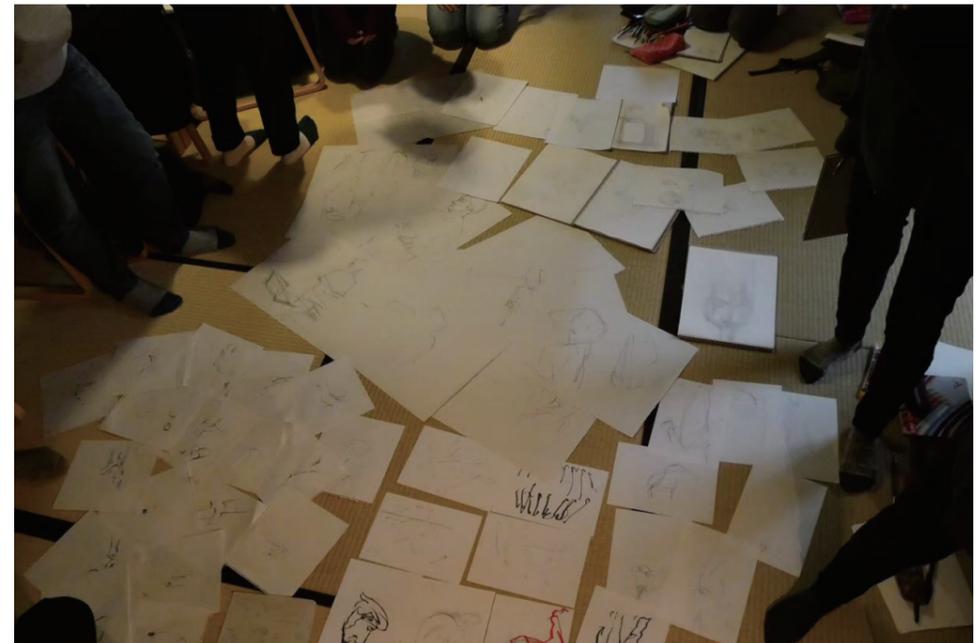


図1 自然科学系の研究発表を聞きながら様々な手法で取った記録を集めたもの。上は宇宙物理、下は生命科学分野。

学生がそれを「対象を把握したり理解したりするためにやる行為」と説明し、それが美術の学生にとっては聞き流してしまうほどの自然な説明であったにも関わらず科学側の学生からは新鮮な発見として受け止められるということがあった。それをきっかけに、科学側の学生の研究発表をする際に、聞き手は普通にメモを取るだけでなく、グラフィックレコーディングをしたり、絵を描いたり粘土で造形したりといった美術的な方法でも記録を取ることを試みるようになった。図1はその際の記録の例である。

2018年度、および概ね同じ形式で進めた2019年度の授業では、タイトルに「社会」をつけたことも意識して、半期の授業を通した学びや発見を自分たちだけに閉じさせずに、何らかの形で外部に向けた発信を行うということを授業のまとめとして履修生に課していた。これを受けて2018年度は京都大学橘会館で、半期の交流を様々な形で表現した展示と「研究発表を絵に描いて記録する」ことを体験するワークショップを兼ねたイベント「artとscienceの共騒実騒室」を開催した。同イベントを含む2018年度の活動記録は授業の参加者が作成したウェブサイトに掲載されている<sup>7</sup>。

2019年度末にもその年の参加者の間で何度か共通のキーワードとなった「見えないもの」をテーマにして展示・ワークショップを企画したが、ちょうど新型コロナウイルス感染症の流行が始まって学校が休校になるなどした時期と重なってしまった。新型コロナウイルスのリスクがどの程度のものなのかがよくわかっていなかった時期だったので、イベントを開催すべきかどうか、参加者の間で相当議論が交わされ、無期限延期ということでステートメントを出すことになった。その後新型コロナによる社会の混乱は長引くこととなり、結局イベントを開催できなかったことは残念だが、新しい感染症の流行という科学的不確定性も社会的インパクトの大きな事象に向かいあいながら自分たちで一つの結論を出し、それを対外的に説明する文章を共同で作成するという過程から学生たちが得たものもあったように思う。以下はイベントの延期を受けて学生たちが作成したステートメントと、その補足として担当教員である私が書いた文章の転載である<sup>8</sup>。

「見えないものをつかまえる」開催延期に関するステートメント

「見えないものをつかまえる」運営メンバー（京都市立芸術大学・京都大学有志）では、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の流行に関連して、文化イベント等の開催自粛要請、全国の小中学校・高等学校・特別支援学校等の臨時休業措置の要請が政府から出されたことを機に、実際のイベントでの対応について話し合いを重ねました。その中で〈感染症対策の専門家の中でも意見が分かれるなど不明なことが多い中、もしも感染拡大につながる一定のリスクがあるならば、それについて無視はできないのではないか〉ということに加え、〈そもそもこのような状況下にイベントを執行したとしても、広く開かれたイベントという私たちの意図に反して、来場者の数はかなり限定的なものになってしまうのではないか〉という懸念から、当初の予定通りの開催は見直すべきである、という結論に至りました。しかしその一方で、「リスク不明」という漠然とした理由でイベントを中止することに関して、社会のいわゆる「自粛ムード」、すなわち〈何もかもが「自粛」の名の下に実行できなくなること〉への強い危機感から、〈ワークショップを「中止」として、人同士の接触が比較的少ない、展示だけに縮小した形でイベントを開

催できないか〉という意見もありました。

この「自粛ムード」といった空気感、そしてそもそも「新型コロナウイルス」のような微小な物体は、これまで私たちが「見えないもの」として、今回のイベントに向けて、念頭に置いて考えてきたようなものでもあります。私たちは、今回の一連の動向を、このような「見えないもの」に向き合う新たな機会だと捉え、イベントの開催を「中止」ではなく「延期」とします。これから、新型コロナウイルス感染症の流行とそれに伴う社会の動きについて、メンバー内で話し合う機会を設け、展示・ワークショップを改めて開催するまでの間にそれぞれが感じたことを、イベントの場で（より客観的な視点から）共有できればと考えています。

最後になりましたが、新型コロナウイルス感染症の流行にまつわる事態が一日も早く沈静化し、一人でも多くの皆さまとイベントの場でお会いできることを、メンバー一同心から願っております。

2020年3月4日 運営メンバー一同

補足：担当教員より

「見えないものをつかまえる」は、京都市立芸術大学の2019年度テーマ演習「科学・芸術・社会の相互作用」の最終課題として、また、京都市のKYOTO STEAM-世界文化交流事業2020-における人材育成事業の一つとして、同テーマ演習に参加していた学生たちを中心に企画していたものです。「テーマ演習」とは、学生の提案による勉強会やプロジェクトなどが正規の授業になる京都市立芸術大学の仕組みです。「科学・芸術・社会の相互作用」には京都大学を中心にした他大学の学生も参加し、芸術を学ぶ学生と科学（人文社会科学も含む）を学ぶ学生が、お互いのことを知って学び合うということをおおまかな目的のもと、何をやるかは学生たちが自分で決めるという方針で緩やかに進めてきました。

このテーマ演習が始まった2018年度は、美術・音楽分野の学生とそれ以外の学問を専攻する学生がそれぞれ自分たちの活動について紹介しあう中で、「スケッチは対象のことを知って自分の中に取り込む行為だ」という美術の学生の発言をきっかけに、サイ

エンスの研究の話を聞きながら思い思いにスケッチをしたり粘土で造形したり、という不思議な取り組みが始まり、その経験を年度末に“artとscienceの共同実験室”という展示・ワークショップの形で他者と共有するということを試みました。

今年度も年度末に展示・ワークショップをすることは決めていたものの、なかなか具体的な形が見えてこなかったのですが、昨年度はサイエンスの学生がスケッチや造形などの美術的なことをやってみるといった側面が大きかったので、今度は芸術の学生の方も科学者がやっているようなことを体験してみたいという声がありました。そして、参加している京都大学の学生の一人が宇宙空間の電磁波を捉えるアンテナの研究をしていたこと、テーマ演習の中で空気中の微粒子を捕まえて顕微鏡で見る実習もしていたことなどから、「見えないものをつかまえる」をテーマにしようということが決まったのが昨年12月頃のことです。その時から、「見えないもの」は電磁波や微粒子のような物理的なものだけではなく、初対面で異分野の学生が集まり、始めはどこかぎこちなかったのが段々と打ち解けてゆくような、場の雰囲気や人と人との距離感みたいなものについても考えてみたい、という声もありました。

試験や卒業制作・論文などでいそがしい年初の時期を終えて、ようやく展示とワークショップの企画が具体化してきた頃に、コロナウイルスの感染が徐々に広がり、美術展を含むイベント等の延期・中止が次々と発表されました。当初は、本展示・ワークショップの規模や性質を考えると、感染予防の基本的な対策は徹底した上で開催しても問題ないだろうと学生たちの多くも考えていたと思いますし、担当教員である私もそのように判断していました。ただ、全国の学校に休校の要請があった前後あたりから、延期や中止を考えた方がよいのではという議論が、運営メンバーの間でSNSのグループ会話機能を使って始まりました。

議論は簡単には収束しませんでした。様々な情報がメディアやインターネットで飛び交っていて、感染拡大リスクがどれほどのものなのか、小規模な展示すら控えるべきほどのものなのか、よくわ

からない、判断が難しい、ということ自身がまず学生たちの間で共有されたと思います。その上で、よく分からない以上リスクをさけるべきなのではないか、複数の人が長時間同じ部屋に滞在するワークショップのみを中止すればいいのではないかと、世間の自粛ムードに流されるだけで決めるのは良くないのではないかと、この停滞した空気をイベントを開催することで晴れやかにしたい、展示会場のリスクは小さくても来場のために交通機関を使うなら来場者をリスクにさらしてしまうのではないかと、より多くの人に来ていただける時期に開催する方が意味があるのではないかなど、様々な意見が交わされていました。学生たちの議論を見ていて、なるべく正確な情報を得ようと努力すること、それでも不確定で分からないことがあるのは前提として考えること、他の人の意見もよく聞いて考えつつ人と違う意見もはっきり言うこと、そういう議論が自然にできていることに、私は嬉しい驚きを感じました。

そのような議論を経て学生たちは、今回は延期する、しかしその際に定型文のようなコメントだけで延期を発表するのではなく、自分たちが何を考えて延期と決めたのかをステートメントにして発表すること、そして延期後に実施する時には「見えないもののなかに取り込まれている」ような感覚に陥った今回の件について考える企画を新たに加えることを決めました。それが上のステートメントに表れています。

意図していたことではもちろんないのですが、芸術と科学の学生が真剣に議論を交わし、社会との関わりについても考えたという意味で、運営メンバーの学生たちにとってとてもよい経験であったように思います。そのことを書き残しておきたくて、学生のステートメントの後に長々とした補足を書かせて頂きました。

2020年3月5日 磯部洋明（京都市立芸術大学 美術学部 准教授）

### 2.3 2020-2021年度

新型コロナウイルス感染症のパンデミックの影響を受けた2020年度と2021年度は、京芸の学科授業は全てオンラインとなり、テーマ演習もオンラインでの活動を中心にせざるを得なくなった。科学側と芸術側の学生がそ



図2 油画専攻の学生の提案で、大きなキャンバスに絵の具を垂らして全員で一つの絵を描いた

それぞれの活動を紹介しあうという軸は保ちつつ、特に2020年度はオンラインでできる交流を探る形になった。その中で学生の発案として面白かった企画には、自分の本棚を写真に撮って氏名も所属・専門分野も明かさずに本棚の写真だけで自己紹介するといったものがある。前期開講になったこともあって特に2020年度は対面での活動は難しかったが、2021年度には屋外を使うなど感染対策に気をつけながら一部対面での活動も行った。

2020-2021年度の活動で特筆すべき点は、科学と芸術を対置した上でお互いについて学ぶという姿勢から、それぞれの専門分野のことから一旦離れて社会的な問題について一緒に考える機会が多くなったことである。その理由としてはパンデミックという状況が様々な社会問題についての関心を高めたことに加え、オンライン中心の活動になることで、夜など正規の授業以外の時間を活用しやすくなり、ゆっくり話す時間をとれたこともあるように思われる。またオンライン化して時間をフレキシブルにすることで、ゲストを招いて話を聞くこともやりやすくなった。具体的には他機関の若手科学者に話をしてもらったり、ジェンダー

や災害をテーマに制作をしている卒業生を囲んだ座談会的な場をもったり、感染症の専門家を招いて新型コロナウイルス感染症について質問をしたりといった企画を行っている<sup>9</sup>。

#### 2.4 2022-2023年度

新型コロナウイルスによる制約が緩和されてきた<sup>10</sup>ことから、2022年度からは徐々に対面での活動を再開した。また活動内容の自由度を大きくし、履修している京芸の学生には、授業期間中に自分の制作や研究のプレゼンテーションをするか、他大学・他分野の学生を交えて何か一緒にやる企画を実施することのどちらかを単位取得の条件として、学生の主体的な企画の割合を徐々に増やすようにした。ただし教員企画によるゲストの講演や学外の研究室見学も取り入れたこともあり、授業回数の制約から全ての履修生のプレゼンテーションまたは自主企画を実施することは困難だったので、他の履修生・教員による企画等の記録を自分なりのやり方で取ってレポートとして提出することも可とした。

学生の自主企画には、全員で一枚の絵を描いたり(図



図3 鴨川の河川敷で拾った石を砥石で削り岩絵の具のように描いてみた

2)、河原で拾った石を削って岩絵の具を作ったり(図3)といった、創作活動を一緒にやってみる形のものはいくつかあった。これらは他大学の学生にとって、芸大生が普段何を考えたり感じたりしながら創作活動をしているのか、その一端に触れる興味深い機会になったようである。また、「展示」という観点から科学と芸術を比べてみたいという学生の発案により、科学コミュニケーションを専門的に研究する京大の大学院生と一緒に大阪市立科学館を訪問して、科学と芸術の「見せ方」の違いについて話し合うという企画も実施された。

#### 2.5 課外活動

2018年度に本テーマ演習を最初に開講した際に、他大学の学生を含む参加者に授業に関する連絡をするツールを決める必要があった<sup>11</sup>。学生たちの意見を聞いて一番使っている人が多く簡便なLINEグループを使うことになると、そのグループを活用して授業以外に学生同士の交流が盛んに行われるようになった。例えば自分たちの関係する展示やイベントなどの案内をしたり、科学技術関係のニュースについて誰かが質問して他の学生がそれに答えたり、社会的な問題につい

て議論が発生したり、授業以外の時間に学生同士で集まったりといったことである。2019以後はLINEのグループを毎年履修生向けに作り直すのではなく、卒業生も希望すればそのままグループに残り、同じグループに新しい参加者を追加する形にして、卒業生と在学生の繋がりも生まれるようになった。また他大学の学生等で平日午後に授業に参加することは難しいが芸大生との交流に興味はあるという人も、まずはLINEグループに参加して日常的にオンラインで交流しタイミングが会えば授業や課外活動に参加するという形になってきた。その結果として科学と芸術の交流に関心がある学生たちが緩やかにつながるコミュニティのようなものができている。

正規の授業以外に、このグループをきっかけに始まったり、立ち上げるときにここで呼びかけてメンバーを募ったりといった形で、このグループの存在があることが実現に寄与した企画も多い。主な例を挙げると、表現の自由と倫理について考える勉強会<sup>12</sup>、学術コミュニティと芸術コミュニティにおけるジェンダー不平等について考える研究会<sup>13</sup>、宇宙工学と美術の合同プロジェクト<sup>14</sup>などである。

コミュニティが広がるのは良いことであるものの、顔の見える範囲で安心して交流ができることと、不特定多数が参加することによるトラブルを避けるために、参加者は直接見知った人か履修生からの紹介で担当教員が把握できる範囲に留めることを基本としているが、それでもLINEグループのメンバーは徐々に増えていて、2024年1月の時点で174名である。そろそろ「顔の見える範囲」とは言えなくなりつつあり、今後の運用における課題であると感じている。

### 3. 考察

教育実践の効果を客観的に評価することはそもそも容易ではなく、またそれは第三者が行うべきことでもあるので、ここでは担当教員として感じたことをいくつか述べるにとどめておきたい。

分野の違う学生同士の交流を通じて学びあう形にしたことで良かったのは、単に「科学」と「芸術」についてお互いに学び合うだけではなく、それぞれの分野の中の多様性に触れられたことである。科学について学

ぶ意義は、単に科学的知識を増やすことだけではなく、科学的な考え方や科学とはどういう営みなのかについて知ることにある。だがこの「科学的な考え方」や「科学者が日々やっていること」には、分野ごとの違いもある。例えば私の専門である物理学のように普遍的な法則性を見いだすことを特に重視する分野もあれば、生物や鉱物などその多様性を把握・理解することを普遍的な法則性とと同じくらい重視する分野もある。また、「知らなかったことを知る」ことを目指す理学的な研究と、「できなかったことを実現する」ことを目指す工学や医学的な研究との間にも、研究の社会的意義の位置付けや何を最重要の成果とみなすかといった点で様々な相違があるだろう。もちろん分野の差だけではなく個人の差も大きいし、異分野の中間的な立ち位置で研究している人も多い。いずれにせよ様々な分野や個性の学生・研究者と触れることで、美術の学生たちが「科学」といわれている分野のことをよりよい解像度で見ることができるようになったと思う。同様に、参加した科学側の学生が芸術という営みを見る解像度が前よりあがった様子も見て取ることができた。

2.1 節でも簡単に述べたように、美術の学生には、自分の作品を紹介するにあたってできる限り平易かつ詳細な言語的説明を試みるように促した。言葉だけで伝えきれないことがあるのは前提としても、ギリギリまで言語化することで何が言語化できない部分なのかを作者本人にもより明確になるのではないかというのがその意図の一つである。また、芸術への苦手意識を持っている人にとっては、芸術作品を鑑賞して何らかの感想を持つよう期待されることは、数学が苦手な人にとって複雑な数式で表現される理論の理解を期待されることに近い。そのことを意識しながら芸術に敷居の高さを感じている人に歩み寄ってみて欲しいということも意図していた。

美術の学生にも言語化が得意 / 好きな学生はいて活発な議論になる場合もあるが、当然ながら言語的説明が得意ではない学生もいる。そのような学生が訥々と自分の制作について語るのを聞く時、科学側の学生たちは皆、謙虚かつ真摯な姿勢で発表者のことを理解しようとしていたように思う。そして時折、必ずしも明瞭ではない美術の学生による言葉を、「それは～ということですか？」というように明瞭で首尾一貫した説明に組みなおしてくれることがある。その時の美術の学

生の反応の一つのパターンは、「それが私の言いたかったことです！」というものである。同年代の学生からそのような刺激を受けて言葉の力を磨くことの重要性を認識することには、教員の指導とは別の効用があるだろう。

私にとってより興味深かった美術の学生の反応は、「そうとも言えるかもしれませんが…」といった、少しの肯定を含んだ困惑である。その困惑は自分の提示した解釈で合っているのかそうでないのかを確認したい科学側の学生の困惑を引き起こし、困惑しながらもお互いを尊重しながら話したいと思っている両者の間でぎこちないやりとりが続くことになる。それを経て科学の学生は、というよりも私自身が、曖昧で広がりをもった何かに言葉による説明を与えることは、様々なものを削ぎ落としてその言葉が指し示しうる範囲の意味に縮約してしまう、場合によっては一種の暴力性を持ちうるのだと、知識ではなく実感として知ることができたように思う。

また美術の学生からは、科学の学生に向かって自分の制作や専攻分野について話さなくてはならない状況になったことで、同じ専攻の学生同士で改めて話をする機会になったという声もあった。なんとなく分かっている気がしている自専攻のことやお互いの制作のことを改めて見直す機会になったのは、当初は想定していなかった嬉しいコメントであった。

最後に、私自身がこのテーマ演習を通してもっとも良かったと思っていることは、科学とも芸術とも直接的な関係はないことだが、学生たちが様々な社会問題について気軽に話ができる雰囲気のコミュニティができたことである。差別や人権の問題、世界の各地で起きている紛争、貧困や格差、科学技術の進展に伴う倫理的課題など、重たく感じる人が多いような話題も、授業中だけでなく日常的な LINE でのやりとりなどで学生たちから自然と話題に出るようになったと感じている。担当教員である私がしばしばそういう話をすることは要因の一つではあるだろうが、恐らくそれだけではなく、科学と芸術という異分野が集まってある程度継続的な交流を持てたこともその要因であるように感じている。つまり、全然異なる分野の人が混ざっているという感覚が、自分がよく知らないことを聞くプレッシャーを和らげてくれたり、自分と違う他者の意

見に謙虚に耳を傾ける姿勢を取りやすくさせたりする効果があったのではないか。加えて、ある程度顔の見える範囲で継続的な交流を続けることで、「こういう話をしたいんだ」と安心して話せる場所にもなったのではないかと思う。

2023 年度後期に本学が京都駅前の新キャンパスに移転したことによって、学外との連携はよりやりやすくなった。今後は他大学の学生との交流だけではなく、地域社会と積極的に関わるような活動も取り入れてゆきたいと考えている。

## 【註】

- 1 他のテーマ演習に関連した報告としては、中ハシ他 (2017), 滝口他 (2018), 深谷 (2021), 井上 (2022) などがある。
- 2 単位互換制度のようなものを利用しているわけではないので、他大学の学生はあくまで任意の活動として参加している。
- 3 といいつつ正直に言えば私自身はあまり楽しめないことも多い。そのことについては磯部 (2019) で少し書いた。
- 4 科学コミュニケーションについて概説した参考書としては藤垣・廣野 (2020) など。
- 5 Weiberg(1981) が提唱した概念。日本語の解説としては小林 (2017) など。
- 6 Weiberg(1981) が提唱した概念。日本語の解説としては小林 (2017) など。
- 7 <https://sites.google.com/view/kcuascience2018/zine>
- 8 ウェブサイトにも掲載している。 <https://sites.google.com/view/kcuascience2018/archive/invisible2020>
- 9 2021 年度の活動についてを紹介するウェブサイトを履修生が作成している。 <https://sites.google.com/view/2021science-art-society/>
- 10 京都市立芸術大学では密を避けるコロナ対策として座学の教室も実技授業に使用する運用が 2020 年度から始まり、2023 年度後期にキャンパス全面移転が予定されていたこともあって同年度前期まで継続していた。この間学科科目は原則オンラインだったが、一部の科目については徐々に対面もしくは対面とオンラインを併用する形に移行した。
- 11 当時の京芸はいわゆる LMS(Learning Management System) を本格的に導入しておらず、2018 年 4 月の着任直後、ある授業を履修している学生全員に連絡したいことがあるがどうしたら良いかと教務課に問い合わせたところ「貼り紙をして下さい」と言われて驚愕したことは、以後ずっと話のネタにしている。
- 12 「座談会 表現の自由と倫理 2022」 <https://sites.google.com/view/foeae20220222/> この座談会で取り上げた事案については磯部 (2023) でも報告している。

- 13 「アート×サイエンス×ジェンダー」(2018)  
<https://sites.google.com/view/art-science-gender>
- 14 宙漆プロジェクト <https://soraushi.studio.site/>  
高岸他 (2023) も参照。

【参考文献】

藤垣裕子, 廣野喜幸 (編) 『科学コミュニケーション論 新装版』 東京大学出版会 (2020)

深谷訓子「研究プロジェクト「抽象のしくみ」2020年度活動報告」, 京都市立芸術大美術学部研究紀要, 65, p. 73 (2021)

井上明彦 (編集・発行) 「つちのいえ 2018-2021」(2022)

磯部洋明 「「宇宙とアート」の何が面白いのか (特集アーティストのための宇宙論)」, 美術手帖 71(1078), p. 102 - 107 (2019)

磯部洋明 「表現の自由と倫理について語る前に— <<88の提案>>をめぐる議論—」, 京都市立芸術大学美術学部研究紀要 vol. 67, p.79 (2023)

喜始照宣 『芸術する人びとをつくる美大生の社会学』 晃洋書房 (2022)

小林傳司 『トランス・サイエンスの時代—科学技術と社会をつなぐ』 NTT 出版 (2017)

中ハシクシゲ, 富田直秀, 藤田一郎, 小島, 徳朗, 礪波恵昭, 藤原隆男, 重松あゆみ, 深谷訓子, 岩城見一 「研究プロジェクト「奥行き感覚」2016年度活動報告」, 京都市立芸術大美術学部研究紀要, 61, p. 45 (2017)

高岸航平他 「宙漆プロジェクト—成層圏における漆造形作品がもたらす新たな価値」 JAXA 大気球シンポジウム, isas23-sbs-048 (2023)

滝口洋子, 吉田雅子, 日下部雅生, 川嶋渉 「祇園祭の鷹山の復興プロジェクト 1 — 曳き手の衣裳と扇子のデザイン—」, 京都市立芸術大美術学部研究紀要, 62, p. 141 (2018)